

〈神戸詩人事件から70年〉シンポジウム 2010・11・20

神戸文学館

図書出版まろうと社

シンポジウム

神戸詩人
事件から
70年

表現者としていまどう
立ち向かうのか



2010年11月20日(土)

午後1時30分～3時30分

場所/神戸市立神戸文学館

〒657-0838神戸市灘区王子町3丁目1番2号
電話・FAX 078-882-2028 阪急「王子公園駅」
下車、神戸市立王子動物園の西隣。徒歩7分。
JR「灘駅」からは北へ徒歩10分。参加費200円



◆パネラー

★戸崎曾太郎 (歴史研究者・治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟兵庫県本部副会長)

★たかとう匡子 (詩人)

★大西隆志 (詩人)

司会 大橋愛由等(図書出版まろうと社代表)

★たかとう匡子

おもひきり みだれている黄菊白菊／すこやかなそらのなかへめげてはならないのちをたかだかとかざし／（略）／をそこはすべて銃身にゆだね／なみだぐましかほりと体温をたかめている／菊に菊がかさなりあひ／かさなりあふ菊が画く紋章にかこまれ／をこのいづく銃口よりまもなく硝煙がぶちをなたれよう

これは一九三六年（昭和11）3月、「牙」に発表された柳三の「乱菊」という詩。これを書いてから4年後に右の詩と「神戸詩人」3号掲載の「戦役」の詩を理由に「神戸詩人事件」で検挙され、懲役2年（3年間執行猶予）の実刑判決をくらった。皇室の紋章である菊と戦争を結びつけたことが当時の治安維持法に触れるといい、判決文の写しにはこんな詩を書いていると将来かならず反戦政治運動につながるから、それを未然に防ぐために検挙するとある。

詩は小さなことで場面を作つてこれを積み重ね、アクションを起こしていく。また異質な言葉で変化をつけるというのは詩の技法として詩を書く者なら誰でも知っている。政治から見たら思想弾圧だが表現者のレベルで捉えたら表現の自由が弾圧された。これは暗い時代の奇怪な事件といえよう。

パネラーの発表骨子

★大西隆志

『へなちよこでもいいだろう、いま書くことと向きあつて』

自らが言葉を紡いで一篇の詩として差し出したモノの行方について、どのように他者に届いていくのか、またそのことで言葉がどのように乱反射を起こすのか、はつきりとは分からない。そして書かれたモノは一瞬に消滅することもあるし、奇跡的に膨大な時間をはらんでしまうかもしれない。へなちよこなばくは、七〇年前の「神戸詩人事件」の当事者なり、その周辺にいた詩を書く若い群像にどう向きあつていいのか、沈黙を守り続ける詩人の胸のうちを知ることとも困難だと感じてはいるが、「身体をあくまで当時に置き、時間をとみにくぐり、共時性として引き受ける視点」（季村敏夫）と共鳴したいと思つている。ある意味において、有事法制の枠組みが確立された今日を切り取つて見ると、七〇年前の出来事の遅延された形が、現代の地層とも繋がっているような感触に啞然とってしまうことがある。表現することの痛ましさや、言葉が発することの覚悟とも不可避ではないはずなのに、ぼくらの今の詩の在り方は七〇年前の詩の在り方にどう促されてきたのか。人の混沌とした生々しさと共振すること、理不尽な社会的圧力を顕現させてくれるのだが。

「特高」による文化運動弾圧

神戸詩人クラブ事件

★戸崎曾太郎

思想弾圧の治安維持法

「治安維持法」は十年にわたる国民運動によって実現した普通選挙法と抱き合せて一九二五年に制定された。同法は「団体変革」「私有財産否定」を目的とする結社・加入を犯罪とするのみならず、そのための協議・それへの支援一切を対象とした。

まず日本共産党の組織的活動を潰すと、その外郭として全評（労働組合）全農（農民組合）を弾圧、一九三〇年代後半になると労働派と人民戦線運動も監視する。あらゆる文化活動・宗教活動をも対象にする。治安維持法は戦争に協力しない者を弾圧する法になる。その弾圧を推進したのが内務省の指揮下で各府県警察部に置かれた特別高等警察（特高）である。

拡大解釈で弾圧拡げる

コム・アカデミー事件即ち日本共産党系の学者・講座派検挙が一九三六年七月

月、一年後に蘆溝橋事件で日中全面戦争に突入する。その年の暮れに労働派と人民戦線運動が弾圧された。

労働派とは雑誌「労働」に依拠する社会民主主義系の学者たちである。人民戦線とはヨーロッパでファシズムの台頭に対抗して共産主義者と社会民主主義者が中心に組んだ統一戦線で、フランスとスペインで政権につくが、スペインでは独伊に支援されたフランコの反乱で潰される。一九三五年七月のコミンテルン（国際共産党）第七回大会は「人民戦線戦術」を打ち出す。

その内容が密かにアメリカ経由で神戸に届いたのは一年後で、それに応じた動きが始まる。反戦反ファシズムのために大同団結は切実であった。

プロレタリア文化運動

一九二〇年代初頭に始まるプロレタリア文学・演劇などの文化運動は、十年後には大きく発展しコップ（日本プロレタリア文化同盟）が結成される。工場・農村にサークルを組織する。特高はその動きを見逃さない。

治安維持法によるプロレタリア文化運動への弾圧は、機関紙誌の発売を禁止し活動家を検挙する。大陸（満州）への侵略開始にあわせ一九三二年から三四年までに二百八十人を越えるコップに関わる文化人が起訴されている。

その後は僅かに小グループと個人の文化活動が残った。神戸ではコップが潰された後、「金星社」というサークルに思想を超えて文化人が集まっていたが、こ

れも弾圧されていた。

狙われた詩人と学生

昭和初期、神戸に詩誌・詩人グループが約五十あったという。しかし一九三五年以後は時代におびえ詩人たちは発表しなくなり激減する。「神戸詩人クラブ」はそういうときに結成された。

神戸詩人クラブは詩誌発行のほかに啓蒙活動として「外国映画会」を開いたが、県内の大学・高専の映画サークルを傘下におく「神戸学生映画同盟」とも提携する。その活動がコミンテルンの指示によるものと特高は断定し、一九四〇年三月治安維持法の目的遂行罪として検挙に踏み切るのである。

「特高月報」からその活動を見ることが出来る。内務省警保局が各府県警察からの報告を編集・発行した「特高月報」は、権力の恣意的な観点・判断が貫かれている。

特高から見た詩人クラブの活動

姫中出身の竹内武男（モップル）（無産者運動犠牲者救済会）活動で一九三一年検挙）は、一九三五年仮出獄してくると、ファシズムによる左翼陣営の潰滅状況を知り文化運動をやろうと決意。同人雑誌「ぼく」に加盟し、人民戦線戦術に沿ったヒューマニズム運動を通じて文化団体の統一を図ろうと、翌年同人誌の進歩的分子を糾合し「姫路詩人倶楽部」を結成した。

一方神戸の進歩的分子橋本宇内らが一

九三三年ごろ文化グループ「青騎兵」を結成、コップの線に沿って活動していたが、「ぼく」の小林武雄（モップルで検挙）と関係が深め、同人「愕神」グループを結成した。

一九三七年竹内・小林・橋本らで「神戸詩人クラブ」を非合法で結成。十七名で発足したが二年で三十余名となる。毎月例会では時事問題を論議した。クラブはさらに総合的目的で合法的な組織として「神戸詩人協会」を設立し、広く文化団体の結集、大衆宣伝活動をめざし機関紙「神戸詩人」百五十部を発行した。また啓蒙活動として外国映画の上映会も行い、進歩的映画人とも提携し、学生映画連盟の活動も支援。

一九三八年、旧制姫路高校で映研の学生が神戸詩人クラブの竹内らと連絡をとる。その運動に共鳴し非合法の「姫高ヒューマニスト同盟」を結成した。

一斉検挙で潰された運動

特高は特に詩人クラブと姫高ヒューマニスト同盟との連携に注目、コミンテルンの方針に基づく三月三日検挙に出た。判断、一九四〇年三月三日検挙に出た。その氏名と判決は別表に示す。詩と映画の運動は潰され、翌年太平洋戦争が始まった。詩人たちは徴兵され戦場へ行くか徴用で工場に行き、学生は学徒動員された。

政府は未だ治安維持法による弾圧犠牲者に謝罪も補償もしていない。

治安維持法をめぐる動向

- 1936年 5月01日 第17回自メーデー禁止される（再開は1946年）
 7月10日 平野義太郎、山田盛太郎、小林良正ら「日本資本主義発達史講座」に参加の学者30余人、治安維持法違反で検挙
- 1937年 7月07日 「蘆溝橋事件」中国に対する侵略戦争開始
- 1938年 7月30日 産業報国連盟結成、労働組分解体
 10月 日本軍、広東、武漢三鎮を占領
- 1939年 7月28日 朝鮮人労働者の日本への強制連行始まる
- 1940年 2月02日 民友党の斉藤隆夫が「反軍演説」、衆議院議員を除名される
- 1941年 12月08日 米英に宣戦布告、ハワイ真珠湾攻撃
- 1942年 9月14日 雑誌「改造」の論文で細川嘉六検挙される
- 1943年 3月15日 大阪商科大学事件、学者・学生30人余検挙される
 7月06日 創価教育学会幹部、牧口常三郎ら検挙
 10月21日 明治神宮外苑で出陣学徒壮行会
- 1945年 7月26日 ポツダム宣言発表
- 1945年 8月15日 日本政府、ポツダム宣言を受諾し聯合國に降伏
 9月26日 三木清、豊多摩刑務所で獄死
 10月3日 山崎内相、治安維持法の継続を言明
 10月4日 GHQ、治安維持法の撤廃、政治犯の釈放を日本政府に指令
 10月15日 治安維持法廃止

戸崎資料

神戸詩人クラブならびに学生映画研究会の検挙と判決について

- | | |
|----------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| 小林武雄 29歳 3月3日 兵庫県 神戸詩人倶楽部
2年 →戦後福祉関係の仕事に従事「火の鳥」「半どん」 | スト同盟 映研 2年執行猶予5年 |
| 橋本宇一(亜駒保) 26歳 3月3日 兵庫県 神戸詩人倶楽部 →戦後は会社員 | 児玉賢次 21歳 3月3日 姫路市 姫高ヒューマニスト同盟 映研 2年執行猶予5年 |
| 浜名与志春 33歳 3月3日 兵庫県 神戸詩人倶楽部 2年執行猶予3年 →戦後の年の1月26日、獄中の無理がたたって37歳の若さで病死 | 打波重信 24歳 3月3日 姫路市 姫高ヒューマニスト同盟 映研 不起訴 |
| 田部悦郎(岬絃三) 21歳 3月3日 兵庫県 神戸詩人倶楽部 →戦後の混乱期に悪酒を浴びて急死。没後、亜駒保らにより『岬絃三詩抄』が出版された。 | 佃留雄 21歳 3月5日 兵庫県 神戸詩人倶楽部 不起訴 →戦後は東京に出て出版社に勤務 |
| 竹内武男 31歳 3月3日 加古郡尾上村 神戸詩人倶楽部 5年 2回目検挙 36年 8.26事件検挙 →昭和51年死亡。翌年遺稿詩集『日没はちぢれた影をたてて』 | 小山邦夫 19歳 3月7日 兵庫県 姫高ヒューマニスト同盟 映研 不起訴 →東大に進学。学徒出陣により戦死。と |
| 沢田良一 28歳 3月3日 兵庫県 神戸詩人倶楽部 不起訴 →留置中に再度の召集を受けヒルマ戦線で戦死。 | 小林浩一 24歳 3月9日 兵庫県 神戸商大映研 2年執行猶予5年 |
| 町田甲一 25歳 3月3日 兵庫県 姫高ヒューマニスト同盟 映研 2年執行猶予5年 →京大卒、武蔵野美術大学教授、美術史専攻 | 山本秋雄 21歳 3月9日 兵庫県 関学映研 不起訴 |
| 内海洋一 21歳 3月3日 兵庫県 姫高ヒューマニスト同盟 映研 2年執行猶予5年 →京大卒、大阪大学教授、社会思想を専攻 | 赤松乾大 20歳 3月9日 岡山県 関学映研 不起訴 |
| 重松景二 22歳 3月3日 兵庫県 姫高ヒューマニ | 里井彦七郎 24歳 3月12日 大阪府 姫高ヒューマニスト同盟 映研 2年執行猶予5年 |
- (この資料は、戸崎氏作成のものに大橋が一部加筆。本名、括弧内は筆名、検挙時年齢、検挙日、出身地、所属、判決、「事件」以降の動向の順(動向は「佃留雄遺稿『暗い谷間のころ』」ネット「樹の森」などの情報を引用)

兵庫県における主な治安維持法検挙者

- 1、京都学連事件（1925年11月から26年1月検挙）検挙8名
 - 2、3.15事件（1928年3月15日）共産党員の検挙 17名
共産党員以外の検挙20名 機械工など労働組合員<目的遂行罪>
 - 3、4.16事件（1929年4月16日）共産党員の検挙12名
共産党員以外1名 労働組合書記<目的遂行罪>
 - 4、1930年2月事件 共産党員の検挙 34名 獄死2名
共産党員以外20名 ダンロップ、神戸市電、海員、<目的遂行罪17名>
 - 5、1931年8月26日事件 起訴者78名 起訴前死亡3名 <目的遂行罪5名>
 - 6、1932年6月15日プロレタリア文化運動1人 <目的遂行罪>
 - 7、1932年7月21日神戸製鋼所一斉検挙9名 獄死1名<目的遂行罪2名>
 - 8、1932年10月30日事件 20名 獄死1名主筆<目的遂行罪3名>
 - 9、1933年3月事件32名 獄死5名 <目的遂行罪3名>
 - 10、1934年2月事件16名 <目的遂行罪2名>
 - 11、1935年度検挙者5名 <目的遂行罪2名>
1935年12月8日大本教団の治安維持法並不敬罪一斉検挙1名
 - 12、1936年度検挙者21名 共産党員5名、<目的遂行罪6名> そのうち倉岡愛穂（新興教育グループ=御蔵小学校教師）は神戸御影署で特高により首を絞められて窒息死。倉岡の死体は「医者に見せるな」「通知を出すな」「葬式を出すな」の三条件をつけて家族に引き渡された。
 - 13、1937年度検挙 共産党再建コミニストグループ8名うち共産党員1名 <目的遂行罪7名> 反ファッショ統一戦線グループ（日本無産党、日本労働組合全国評議会・労農派）22名
 - 14、1938年度検挙4名 日本無産党
 - 15、1939年度検挙 日本共産主義者団9名 <目的遂行罪>
コミニストグループ（読者回覧倶楽部）10名<目的遂行罪>
天理本道検挙7名<治安維持法並に不敬罪> 在神戸朝鮮人学生民族主義者検挙6名<独立運動>
唯物論研究会3名 灯台社6名
 - 16、1940年度検挙神戸詩人倶楽部並に学生映画研究会<目的遂行罪>（3月3日）17名 日本共産党再建準備会検挙22名
 - 17、1941年度検挙 耶蘇基督之新約協会検挙（9月12日） 大自然天地日之太神教団検挙（9月13日） 無産会系基督者グループ検挙（9月26日） 左翼姫路読書会（12月10日） 灯台社再建運動検挙（12月1日）
太平洋戦争にもとづく予防検挙（41年12月9日）12名
 - 18、1942年度検挙者神戸詩人倶楽部検挙1名 左翼非合法研究グループ検挙（3月8日）3名 在神戸中央神学校朝鮮人学生民族主義グループ（12月9日）5名 きよめ教会長老派検挙（6月26日）1名 明治学院等左翼グループ検挙（8月29日）8名 プロレタリア短歌運動2名 朝鮮独立運動（9月11日）3人
 - 19、1943年度検挙 在神戸朝鮮人民族主義グループ検挙（3月31日）4名 日鉄広畑製鉄所内共産主義グループ検挙6名 朝鮮独立運動4回で7名 きよめ教会日本聖教会追検挙3名 第七日基督再臨団の検挙（9月20日）1名 神戸商業大学新聞部左翼グループ検挙（1月20日）
 - 20、1944年度検挙 東方同志会検挙（1月30日）10名 元大本教信者の検挙（3月3日）
朝鮮独立運動検挙（8月11日前後）8人
- 治安維持法に類する違反（陸軍刑法並に臨時取締法違反）（4月2日） キリスト教教育者2名臨時取締法違反（6月2日） 日蓮宗信者1名

「神戸三」以後「第一冊（神戸詩人クラブ）」に關して（永らくの懸案でもあり、また必要機関でもあつた詩に關する一切の討論や詩人相互の親睦のため、一月十七日附けを以て「神戸詩人クラブ」の設立を見るに至つた。

第1次「神戸詩人」～6号
光本兼一編集 昭和5年 謄写判

第2次「神戸詩人」～7号
光本兼一編集 昭和6年5月 タブロイド判

第3次「神戸詩人」～19号
光本兼一編集 昭和8年 A5判

光本兼一死亡 昭和9年

「神戸詩人」という地域性の性格をもつた郷土意識で、詩人たちが活動する気風をかもすようになったというのも、光本兼一という呪われた詩人の役割を無視するわけにはいかない。」君本昌久／資料(10)

「戦前神戸におけるモダニズム詩（シュルレアリスム詩を含め）全般についていえることは、その詩のもつ機能性といえ、諷刺ということにあるとみてさしつかえなさそうだ。たとえば小林武雄は、「神戸詩人」第四冊で、「リアリズムの修正」という一文を書き、そこで「吾々が精神生活の全領域にわたって拘束された場合、作品が感性的に、主知的に、思想的になって行くのは当然であり、従つて斯かる歴史的必然性を無理矢理に認識する事に依り、吾々の思考は外部世界の事実に対しては分析的に諷刺的になる。それは益々詩の世界に諷刺的思考を促し、感覚や感情の共感を拡げる」といつていることから考えてみると、当時の社会環境においては諷刺に依拠して、どんなに詩を書くこととしたことがわかる。しかも、その諷刺は内発性によるものというよりむしろ外発性によって、内発性に順応させていたということである。その点では、西脇順三郎、春山行夫の詩と詩論とは根ざされたかたは異なるにしても、詩の内部構造を変えていこうとする能動的な意味からすれば、環境に適応した独創性において、西脇や春山の詩法を修正するものではなかつた。しかも、日本語の内部にひそんでいる起動力が、ほかの要素でいびつにねぢふせられていたという点においても、同様に欠落感をおぼえずにはいられない。したがつて、ここで逆説的な表現をすれば、詩が社会的事件、「神戸詩人事件」というものにおいてスパークしていなかつたならば、当時神戸にいた意識的な詩人たちは、時代状況の窒息感のなかでニヒリスティックな行きどまりの暗礁へのりあげられてしまつたかも知れない。ところが幸か不幸か？いやこの言葉はあてはまらない！ともかく神戸詩人事件は苛酷な時代の風圧のなかで、焰をまとうような意味を詩人に要請したのである。」

「『当時のモダニストたちの多くが芸術的抵抗の意志を持っていたことは事実であるが、それには自ら芸術的な限界があり、正面きつて国家権力と対決するといつたような性質のものでは、はじめからなかつた。この時期にモダニストのつた態度は、見方によつては時局に対するインテリの（逃避）の一形態であり、また、彼らの作品の芸術的・文学的徹底感、不完全性からも、容易に実証できるはずである。彼らは時局から離れた（理念）によつて自慰していたのにすぎない。その（理念）がマルクス・レーニン主義であつて、シュルレアリスムであつて、新領土の派的サタイア主義であつて、実質的には大差のないものであつたといふべきであらう。これは「神戸詩人」にかぎらず、「新領土」や「VOU」についてもいえることである。それゆゑ、このような事件に問われて転向書まで書かされたといふならば、単に受難としか言ひあらわす術がないというのも頷ける。」

（鮎川信夫／資料(39)）

神戸詩人クラブ
小林武雄、亜騎保、神戸三、佃留雄、光本兼二が中心となり兵庫県下の詩人に呼びかけ結成(昭和12年結成)

第4次「神戸詩人」
小林武雄、亜騎保、神戸三ほか 〈第一冊〉昭和12年3月発行 〈第二冊〉昭和12年6月発行
〈第三冊〉昭和12年10月発行 〈第四冊〉昭和13年12月刊行 〈第五冊〉昭和14年12月発行

「（神戸詩人クラブの）成立当時クラブ員であつて、最後まで「神戸詩人」同人に加盟しなかつたのは、「牙」同人、足立巻一、米田透、「オペラ」同人、静文夫、司馬俊三、「水族館」同人、武藤武雄、等六名にすぎない。」（小林武雄／資料(3)）……というように、「神戸詩人」をパロメーターにした時代に対する詩人の良心的な態度の測定している。（君本昌久／資料(10)）

1940年(昭和15)3月 神戸詩人事件

「古い秩序と伝統への破壊と挑戦を目ざす「神戸詩人」のモダニズムは、そのアバンギャルド意識において東京のそれより急進的だったから、コミニニストが芸術的に後退すればシュルレアリストになり、シュルレアリストが政治的に前進すればコミニニストになるというヨーロッパ的な定式が、そのまま受け入れやすいような精神風土の中にあつたと思はれる。」（鮎川信夫／資料(39)）

小林武雄「神戸詩人事件」／資料(03)
「神戸詩人クラブは、所謂「神戸詩人」とは何等の有機的な関係の無い団体として設立された。それは「水族館」「木楽」「オペラ」等によるモダニズムの詩人たちと、文学上のエコオルを離れた「櫻神」「以後」「驢馬」「ぼく」等によるリアリズム系統の詩人たちの間で、文学上のエコオルや、個人的感情にあまり純粋なや献身をしている人が多いため、「神戸詩人」というひとつのサークル内で、異趣同舟して文学活動することを潔しとしない考えが多かつたこと、また昭和六年の満州事変を契機として台頭してきたファシズムの重圧や、ヨーロッパに於ける「文化の危機」の叫びが詩人たちの共通の課題として、ようやくその関心をよび起こしているのにも関わらず、この小さな地域の詩人たちが、その暴力(ファシズムの)に目覚めず、あるいは共同してこれに対抗することを回避しようとする傾向が著しかつたので、「究極の目的」を親睦と芸術の向上であるかのように、いわば偽装したのである。」
「例會が反ファシズム運動に果たした役割の重要性に鑑みて「神戸詩人事件」の司法取締り中には、その回数・議題・指導的役割を果たしたと思われる同人等が、詳細に追及された」

小林武雄に対する異見と批判
★落合重信／資料(06)「当時のことであるから、「特高」のデッチあげの要素が多くどこまでが事実なのかかわりにくい。関係者のほとんどは、無実を言っており、結局、一般には特高権力によるデッチ上げ事件として受けとめられていたものだが、戦後の昭和30年、関係者の一人小林武雄が、『詩学』(東)に「神戸詩人事件」を書いて、この事件における反ファシズム運動の存在を強調したことによって、問題は複雑となつた」
「亜騎保は言う。「神戸詩人」クラブの設立に主として当たつたのはボクだが、(クラブが反ファシズム運動の要素があつたことについて)ボクはそんなことは知らない。規約を書いたのもボクだが、その際にそういう意図を持ちつつこういうふうを書いておこうというふうな話は全然なかつた。小林に依りてそういう意図があつたとしても、主要メンバーの誰もがあつたことにならないのではないのか。(聞き書き)――(括弧内は大橋の補足)」
「個は言う。「小林は最初から『詩学』に発表したような意図のもとにクラブ活動に従つたものではなく、あれはあとから過去を美化したものです。」(個メモ)」

「亜騎保や神戸三がそうであるように、浜名と志春も佃留雄も光本兼二も広田好夫も文学少年にすぎなかつた。ことに個は「実践的マルキスト」では絶対になかつた。個は昭和五十七年に六十八歳で死んだが、遺稿「暗い谷間のころ」(昭和五十八年九月、培養社)に無実の委細は尽くされてゐる。ただ、亜騎も個も詩作が高揚するにつれてもつと広い舞臺で発表し、同好の友を得たいと思つていただけで、政治的意図はひとかけらも持っていなかつた。まして「神戸詩人クラブ」は地下非合法組織といふようなものではさらさらなかつた。」(足立巻一／資料(19))

「神戸詩人事件」に関わる文獻のどれからも「いたましさ」が伝わる。直接的に関わるを得なかつた人の事後的な記述、時間を経て綴られる非当事者の記述、どれにしても「いたましさ」がある。」
「事件に關して、もはや誰も語らず、事態は闇の奥底で凍りついている。沈黙の奥に潜む外傷的記憶が、ひとたび暴れだすと手がつけられないといつた按配で疼きを形成している」(季村敏夫／資料(33))

それぞれの引用文献につけている資料の番号は、本誌11頁の「神戸詩人事件書誌データ」に掲載している整理番号です。

参考資料

詩誌「神戸詩人」ほかの作品

◆春風

沢田良一

土蔵の白壁の落ちる音がとぎれとぎれに聞こえて
今日の落ちぶれた神の吐息は
我々の眼の前で只一いろに塗りつぶされて
崩落への眼を閉じ
平和な祭式はもはや遠くの響きの中に
黒い本をみつめて
押し流されていった塵埃に
今は感情も忘れてちつと墓標の前に横たわっている
まるで狂人のたわむれのやうな光を噛みしめながら
風はみどりの草の上を渡っていつ
呆けたたましいのやうな黄色の斑点を蒼空と結び
つけて
波紋のやうに拡っていつた暮婦の叫びには
何の悲哀もなかった
一瞬に無限の泡沫は巨大な鉄塊のように暴走し
水の中の出来事のやうに
家畜が堤の道を曳かれていつた

(「神戸詩人」第一冊)

◆日没はちぢれた影をたてて

竹内武男

日没の底に沈み乍ら
ほこりたつ道傍を
昨日聞いたこともない声々が
嵐に打ち砕かれた花の種子のやうに飛んであつた

荒涼たる歴史の腐蝕に煙りながら
モロウズの焔に頬を差し出し
逞しい風の吹きまくるままに錯乱していく
一握りの愛と悲しみと
貪るやうに受け容れた地表では激しい生死の花が咲い
たとはいへ
偉大な仕事にたづさはる多数の唇に繰返へされて
みちたりた伝説のまはりや久しいこと
冷たく花咲く身にとつて
茫茫たる白い夜の季節をどうして拒むことが出来よう
この叛かざる願は
罪のない大地の裡に棲まふ百武士の罪でないとしても
ころがる大地よ
或は東方の若々しい太陽から
或は西の夜の闇へ転り廻るのはお前でなかつたのか
聽て死の眠りを眺めて生命の呼聲醒すままに
若々しい己れを燃やしたてるもの年若い記憶から
取り除かれた燃え滓をもてあそぶ風が吹きつける
古い慣はしの臉ひらいたときに
思はずも澄んだ哀愁に花咲いた火の滴で
心臓と風を隔った
己れを捧げた美しい人類のために
己れを捧げた美しい最後の節々が
とり残された悲しい最後の節々が
風に描かれてお前の上に散る千万の音色から
荒々しい若芽を育てて実るまで己れを憚るものは唯一
つてはなかつたか
手には腫れぬ刃を持ち
金狼の心を心として
はげしい力で湧き上がる節々に身を寄せ
祝祭の歌唄いながら
パリケードの上で闘ふのはおかしいであろうか
源死の道傍で
千福の目を送ってきた
見渡すかぎりの眺めも一段とけはしく
歴史の暗いほとりにたれさがる地平線を灼けるやうに
日没はちぢれた影をたてて

しつかりと燃える大地に打ちつける
(「神戸詩人」第二冊)

◆戦役

岬絃三

紙切れのごとく
落下してゆくのは翅をすぼめた蝶であらう
貧相なひかりを背負ひ
たたかひははまだにつづけられてある
にくではならない花々のあひだを
なんびやくねんめかの氷河がながれはじめたのろしの
ごとく
喊声をふきあげる太古の流れ
ひようひよう紋章刺身をせまつてある
とげのある花をかざし
執拗に氷結しきつてきた河川を
美事にひきさいてゆくからほどこからやつてくるの
か
あほいひかりをあびる遺訓
訣別のうたさへ
氷のしぶきをかぶり
非情の座に在る肺腑にするどくつきささるのであつた
いくたびか
断崖にたつ再建のひとびと
ばねをひそめた氷河はあくまでおのれの開花をすまぬ
かうとしてある
(「神戸詩人」第三冊)

◆乱菊

岬絃三

おもひぎり みだれてある黄菊白菊
すこやかな空のなかへめけてはならないのちをたか
だかとかざし
穢れのないうたにむせびながら菊の系図

男の系図

それぞれまもつてきた
菊はみな菊の族によりそひ
をここはすべて銃身にゆだね
なみだぐましいかほりと体温をたかめている
菊に菊がかさなりあひ
かさなりあふ菊が画く紋章にかこまれ
をこここのいづく銃口よりもなく硝煙がぶちはなたれ
よう
(「牙・昭和11・3に発表)

◆若き秩序について

濱名与志春

さめるプラチナ村落の
望楼のかすむ遠いところで
悶える雲たちが怒りはじめた
わきあがるひとつの焔の手は
若き面細面のおののきをつつみ
白熱した機関車とでもいふような
敵意を示すメキシコの蕊のなかで
愛するといふ祖国の気温とともに
もえる男の鐵の意志をつらぬき
なほも卑俗な地球は燃えてある
そんな平衡のない白日の下では
さびしい重厭の空気がしらす
杏の実はいくつも小さい珠をつけ
黄色いろのメンドリ七羽
逸楽をむさぼる淑女のやうに
ひややかな科学戦の夜明けを待つてある
かうした明暗のつくる一切の世界が
一九三九年のわかき地域にたつとき
民族とどの一線において繋がるのだから
裏はてた伝統の柵のなか
いつもシバイもどきの政治に陶醉し
のべつな暮なしの新思潮を嚙つて

再建の日のために毒汁を吐きつづけた。
(「神戸詩人第五冊)

◆廣の薔薇と星

佃 留雄

際限なく鳴り響く花蔭に
殺意なき鳩と勳章をぶらさけては
アジアの西に鎧戸は悪意なくひらきさかれて行くのだ
そして君たちの春にまたしても黄金の十字は架され
日々のユニホオムを覗き見るベットの下の
一個のレンズを留意して規則正しく歩まねばならな
つた
砂粒より小さい骰子を振る運命に依つて
圓錐の頂點で自転車に乗ることを許された君よ
星顔の花を眺めよ僕たちは眠る
暫く透明な君の小指が見失はれた毒舌の中を歩む時曲
折
多いコップのエレガンスに就いて語る言葉は常に五本
の指に用意されてあつた
然り僕達はコップの内部にざらんと輝く絶鳥を飛ば
すのだ
ヒットラーは食らひムツソリーニは遊びスターリンは
笑ひ続けた
君と僕とそして複数たちはカンカン帽を打ちふり乍ら
世界の旗で包囲される
憂鬱なプラアトンのひたひに赤茄子が繁茂したため地
代は暴騰した
(「神戸詩人」第五冊)

◆神話主義的雑考

面騎 保

数ニラミの馬にまたがり
おゝ唇で洋琴をたゞき
バルチザン不眠の草叢

魚は横に饒舌つて
使用に耐へる牡牛がぬい
食事は何時か本国に遠く
タマネギは覆郁とわらひながら
臨闘する近代であつた
胸に漏れたトネリコらと
宗教の散つていく音
ああ まつたくあちらでは
翻訳の断片に隠れ
菓をしがむコムユニストが
シヨラ色の重を掻く
皮肉な動物の習慣を知らない
燃えたつ村々
黄色い抒情の
行衛に就いて
古風な言語は暫く風をなめた
にがいビンボンの体験
それから時計をまはし
やゝ温度のあるキャベツ畑
をめぐり 冷たい東方を避ける
この道は農夫に通じる由
かなり生産的な浪漫横丁
思へば嘗つて電燈を揺さぶり
それはふしだらな祭典がつづいた
衛生のある訓話を招き
君と古い青年に溶解を
誘ふ枯れた季節の昼は
不良の文明を暗くする
アブハチとらずの賭けの中
薄めた思考は
鍛冶屋のほとり
泣きほゞけ
匿名である
兎に角神秘的といふ
頬に聴け

(「以後」第一号)

「神戸詩人事件」書誌データ 文献・資料データ

- (01)内務省警保局編「社会運動の状況」(1940(昭和15)年度)
 (02)内務省警保局編「特高月報」(1940(昭和15)年度)
 (03)小林武雄「神戸詩人事件」(「詩学」1955年(昭和30)10月号)
 (04)小林武雄「否の自動的記述と一個の料理人」(1967年(昭和42)半どんの会出版部)
 (05)佃留雄「神戸詩人事件とは」(「歴史と神戸」1979年(昭和58)12月1日刊)
 (06)落合重信「デッチ上げの神戸詩人事件」(「歴史と神戸」1979(昭和58)12月1日刊)
 (07)佃留雄遺稿『暗い谷間のころ』(兵庫まぼろし叢書No.2 1983年(昭和58)、培養社)
 (08)町田甲一「怒りの樹「白揚」は老いて」(「姫高14回生クラス会誌」)
 (09)広田善緒「二つの手紙」(「輪」23号)
 (10)君本昌久「戦前神戸詩史ノート」(「蜘蛛」3、4号)
 (11)陸井敏子「神戸詩人事件のこと」(「兵庫史学」32号、1963年(昭和38)2月10日)
 (12)高須剛「神戸詩人事件ノート(しらさぎ・そさえて)」
 (13)内海繁「神戸詩人事件余話」(「姫路文学人会議」31号)
 (14)及川英雄「暗い青春-昭和初年のプロ文学活動」(「半どん」41号)
 (15)桑島玄二「こんど僕に詩の書ける時代がきたら(浜名与志春論)」(「兵士の詩所収」戦中詩人論、理論社、1973年(昭和48)3月)
 (16)飯島耕一「硫酸の日々」(「世界」1977年(昭和52)1月号)
 (17)島京子「殉教者」(「バイキング」125号、『夜の訪れ』四作の内の一作の小説として)
 (18)中野嘉一「前衛詩運動の研究」(発行所 株式会社 大原新生社)
 (19)足立巻一「親友記」(第8章、新潮社、1984年(昭和59))
 (20)安藤礼二郎『西播民衆運動史(昭和)--その弾圧と抵抗の記録』(13章、14章、1983年(昭和58)8月25日、「姫路文学人会議」)
 (21)足立巻一「神戸詩人書誌」(「文学」岩波書店、1985年(昭和60)1月号)
 (22)江間章子「埋もれ詩の焔」(講談社、1985年(昭和60)10月21日)
 (23)明石博隆・松浦総三編『昭和特高弾圧史 1930~41年』(太平出版社)
 (24)伊勢田史郎「私の出会った神戸の詩人たち」
 (25)詩誌「カタルシス」No.1 同人・足立巻一、重騎保、田部信、米田途 (B3裏表4頁)
 (26)重騎保詩集『動物の舌』
 (27)直原弘道「神戸における「火の鳥」書誌」(「文脈」4)
 (28)「旧制姫路高等学校 白鷺城下の青春」
 (29)「広田善緒追悼特集」(「輪」38号、1974年)
 (30)戸崎曾太郎「神戸詩人クラブと神戸学生映画連盟--「特高月報」に見る文化運動弾圧」(文化誌「はばたき」14号、2009年4月)
 (31)君本昌久「戦前神戸詩人の受難」(「思想の科学」1968年4・5から)
 (32)戸崎曾太郎「「特高月報」に見る文化運動弾圧」(月刊「不屈」神戸中央支部版、No.419 2009年5月15日)
 (33)季村敏夫『山上の蜘蛛』(みずのは出版、2009)
 (34)季村敏夫『窓の微風--モダニズム詩断層』(みずのは出版、2009)
 (35)高橋新太郎「〈神戸詩人事件〉と関連詩誌--「滑車」・『以後』」(「彷徨月刊」「集書日誌」1995年)
 (36)高橋新太郎「〈神戸詩人事件〉と関連詩誌2」(「彷徨月刊」「集書日誌35」1996年)
 (37)「樹の森」<http://www.urban.ne.jp/home/festa/>
 (38)「神戸詩人 第五冊」(神戸詩人クラブ、昭和14年11月10日、「神戸文学館」所蔵の複製品)
 (39)鮎川信夫『鮎川信夫著作集 第八巻』(「神戸詩人事件」思潮社、1976年)
 (40)戸崎曾太郎「神戸詩人事件から70年-戦争協力を強制した思想弾圧」(「治安維持法と現代」No.11、2011年春季号、治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟 編)
 (41)季村敏夫「「神戸詩人事件」関係一次資料・押紙三書簡と解題」(兵庫県現代詩人協会会報31号、2012年6月30日)
 ★この書誌データは、たかとう匡子氏作成のデータに基づき大橋愛由等が情報を追加しています(2012年9月18日更新)。

◆冬

中桐雅夫

海にきて
わたしは
おしひろげたしろい乳房に
顔をすすりつけてみた

りようらんたる思辨は
季節に似ない
このひといきひときが
ふたりは裸の馬にまたがり
駆けに駆け

つめたい指ほどにすみとほつた姿を
七彩の虹

(神戸詩人第五冊)

◆手掌によせる哀歌

津高和一

しなびれた地図
巨大に破れた船體
その肋骨の あちら側に
蝶は 舞ひ
木無ハム空一つむばいに 手をひろげ
葉っぱ は たちならぶ枝に ぶらさがり
歩いているのは 賣婦婦

その地帯
岩は飛沫に 曬いててみた

(神戸詩人第五冊)

◆一幕物

小林武雄

西洋ではナマのニンジンを食べるのは青春を食べるに

等しいと謂ふ

ランアの仇はホラも吹ける強者であるのに越したこと
はなからう
貴下はライフルを担いで応援に来てお呉れ
ヘチマの總統よ人民を悲しませるでない
じねんしよはどんたくに樹立てるであらう
時として、理解出来ても、愛を以てしても、然もなほ
許し難き事実

なんたる卓抜、議會ウリウリを囃かしたり
クウボン三等局々員の夢判断
娘よ、そなたの青春が不幸にして来なかつたり、否々
来て呉れる事を私は祈らう
その時こそ父とそなたの自然は血に依つて交はるだらう
ああ企画庁は産業的にオカミサンの普及を計り
英雄は吝でない閑日月の為に鷹程一万四千軒に賭け
貴下の睿智に俟つて審判されることは不肖の光榮とす
るところであり

それは幸福なぞと俗悪なるありきたりのピアニシモで
は御座らぬ
従つてヒコボンデリイ編纂委員会は玄關からホールに
まで到るカラマードへ答へるであらう
人民戦線に於ける着張の壮士諸君、雨天の場合は履歴
書を書き給へ

団長の夥しき American sang はいちまつの新領土の
呼名のそれではない
然るに若い神様は戦ひに崩れアルジェリア語で不品行
になり
娘よ、そなたの母は夫を富ますに顧客の万年筆を平氣
で失敬する位の社会的矛盾に氣にせぬお優しい人で
あった

正に伸びと拡がりの上に身を以て虫のるところをお愛
しなされた
それなのにコムミニケの形式に依る五分間は処々正誤
表を附属してあたり

Amurai
財団法人日本作家協会草いぎれの中の草いぎれで
ある

死ぬ気になれば全超現実主義もある、だが誰方が逃か

りなされるか

傑物雲集
青目赤目
にしか配給出来ないと思ふからなるべく直接申し込ま
れ、ば幸甚であるが結局それがよくないものになる
のである

娘よ、そんな時そなたは打据えるために握りしめ、漣
しない憎悪に奮ひ起つて、オヤヂの襦袢を博物館へ
寄附して下へ。

◆三種の Dongoros

小林武雄

.....前略30行.....

頬を押し分けて枝に拾ふ

ソオスは突出している

感受性を拡大して真珠を割る

新しき名のための將軍の意志表示

わが兄弟よ、私は切に君等に願ふ

創始に捨台詞あり

野蠻人より修辭が長期であつた

頭の分離

アワビのような無機物広場ににぎほふ

資本の神秘主義に就て

トンカチの将来※コスモスの嘆き、其頃私はバラ

ソル工場の職工をしていた。私は恋人の為にバラ

ソルを造ることを約束して、毎日部分品を秘かに自

宅に持帰つては、これを組立て、刻苦勉勵の甲斐あ

つて、私は一台のタンクに乗つて恋人を訪ねること

になつた。

※コクトオの鶯

※新飛行機とは言わなかつた

一風変つて

二〇世紀に若き周囲を壊る

オウムを保護する

鳥々のポンプは弁証法のように継続している

.....後略23行.....

(神戸詩人第四冊)



浜名与志春出版記念会(昭和13年4月16日) 前列右から広田善穂、津高和一、小林武雄、伊田耕三、相留雄、柳枝三、浜名与志春、大垣泰治郎、加藤一郎、光本兼二、後列右より竹内武雄、藤輪保、一人おいて中柳雅夫(この写真と、表紙の「神戸詩人(第一冊〜第四冊)」の写真とともに『兵庫の詩人たち—明治・大正・昭和詩集成』(君本昌久・安水稔和編、神戸新聞出版センター、1985)より引用)。「神戸詩人(第五冊)」は神戸文学館所蔵より撮影

シンポジウム企画者からの挨拶

大橋愛由等

いまからちょうど七〇年前、神戸(兵庫)の文学界を揺るがす大きな事件が発生した。(神戸詩人事件)と呼ばれているもので、日米開戦を翌年に控えて軍事色が濃厚になっていた一九四〇年(昭和一五)三月、詩誌「神戸詩人」同人と、「姫路ヒューマニスト同盟」にかかわる兵庫県下(主に神戸市と姫路市在住者)の一七名が、治安維持法によって検挙された。

これは「神戸詩人」と「姫路ヒューマニスト同盟」にかかわる若者が、共産主義を広げるための活動をしたという嫌疑をかけられたものだったが、特高によるでっちあげであることは明白で、「神戸詩人」同人の詩人たちはひたすら「表現の自由」を求めていただけで、政治色はほとんどない文学活動であった。それが、「密告者」によるクレド込みが直接的な導引となって、長期にわたる拘留と取り調べが行われ、特高の筋書き通りの陳述書への同意が強制され、「転向」を余儀なくされたのである(逮捕された者の殆どはもとから共産主義者ではなかった)。転向もなにもなかったのであるが、特高の筋書きに従わざるを得ない当時の社会的圧迫があったのである。こうした権力による自前の筋書きによる「犯罪と罪状の発生」は戦前ばかりではなく、つい最近も検察大阪特捜部による「犯罪と罪状の発生」(作られた犯罪)を見てきたばかりである。こうしたことを考えると、この「神戸詩人事件」を考えることは現在のわたしたちの課題でもあるのだ。

シンポジウムでは、こうした「表現の自由」と「作られた犯罪」は現在でも十分に思惟するにたるテーマであると考え、また、事件が起きて70年を経過したことによる評価の転換(戦後になって、事件当事者による事件への発言に関する温度差)をも討議の対象としたいと思っている。

この事件は、神戸や兵庫県において表現をする者にとって、検証しつづけなければならない事案である。今年がちょうどその区切り目にあたることで、いま生きているわれわれの手で、公開の場で再び壇上に乗せ、語り合いたい。

本日は、事件の社会性から見た視点と、「神戸詩人」で展開されたモダニズム詩作品が70年たっても十分に評価に値する作品であることを見据え、神戸の文化のありようについても、討議の対象にしたいと思っている。

二〇一〇年十一月二〇日

神戸文学館にて